

他者の「欲望」を前にして

古井由吉『杳子』をめぐる

(原稿用紙換算40枚)

疋田 雅昭

『杳子』も他の近代文学と同様、作家の言説から受ける典型的な受難を背負ってきた小説であると言ってよい。芥川賞受賞以来、多くの場所での自己の作品世界を語るねばならなかった古井は、様々な杳子読解の鍵となりそうな言説を残している。

僕は大学紛争の中で一番感じたのは、そういう観念の脆弱さが暴露されたということなんです。そういう支えを失った人間は、まず正直に自分の足場を探るといふ努力に向かうべきだと、僕は感じたのです。その支えというのは僕の場合だったら個々の人間とか、個々のものとか、あるいは心情の動きを具体的に書いていくということそのことだったのです。

『杳子・妻隠』を語る^①

「内向の世代」の面目躍如といったところだろうか。こつした発言を受け、多くの論者は作家古井由吉の構想やモチーフを探ろうとする。

『彼』を書かぬことによって成り立っている小説です。杳子からどのくらい彼に照り返すかということなんですけどね。

「新しい文学を求めて」^②

古井の目論見が成功していたことは、早くから単に杳子を読むのではなく、杳子を通じてSや姉を読もうという論^③が存在していたことからわかる。

だが、作家の言説から作品の意味を考えることも、受容理論的に作品から論者が自由な読みを引き出すことも、重要視する作家の言説や自己の読みが恣意的であることに無関心な点においては、表裏一体の行為であると言えよう。例えば、作家のモチーフを重視するのであれば、

食べるのが何でもない行為になってしまった時代では、あれはちょっと掴みにくいかもしれませんね。ただ人間の営みを還元していくと、セックスというものよりもずっと強い力で、食べるということが出てくるのじゃないか。

という、先の引用の続きにある食の問題に拘った古井の言説をどう考へるべきなのか。この問題系は和田勉の指摘^④に至るまでの二〇年近くもの間、なぜか重要視されてこなかったのである。しかし、一方では

杳子の病床は脅迫神経症だけではなく、もう一つの顕著な症状として離人症が併存している。離人症は行動感喪失や存在感喪失、感情喪失、身体感覚の疎隔感などをともなう症状であるが……

という様な^⑤、精神に異常をきたした女の話であるということから、精神分析学の知識を援用した論文^⑥も目立つ。しかし、なぜ架空の物語において杳子の病気の内幕を問うのか。心理学の成果が文学で実証されることが、双方の学にとって何の意味があるのか。なぜ『杳子』とい

この名の物語においてSもしくは姉を読まねばならないのか。そして何よりも、これらの選択のプライオリティの根拠が示されないは何故なのか。

研究史を鑑みると、とりあえず『杏子』の読者には三種類の「欲望」が喚起されていると言つてよさそうだ。それは、杏子(の病氣)を読みたいという「欲望」、逆照射された「彼」を読みたいという「欲望」、そして姉を読むことで「正常」の自明性を考えたいという「欲望」である。これらは、もちろん複合的な形で現れるわけだが、論文の場合は、通常の読書以上に、どれかの「欲望」が強く顕在化するわけだ。しかし、この前提にこそまず考えるべき問題がある。

一 視点変換 混在する話法・焦点化

この小説の第一章が非常に重要であることは、すでに多くの論者に指摘されていることだが、この章での時間と視点の移動に関してはあまり注目されてこなかった。第一章は、「杏子は深い谷底に一人で坐っていた」という印象的な描写から始まる。この語りは、杏子のもとに向かいつつある青年を「彼」と呼び、「追いつてられるような気持」とあるように、「彼」に焦点化しつつ谷底の杏子に近づいていく。同時に「あの時も」とか「さしかつたのだらうか」などという表現は、その語りの時点が谷底の物語りの外部にあることをも示唆している。(引用中の傍点は論者による 以下の引用も同様)

後になって、お互い途方に暮れると、二人はしばしばこの時のことを思い返しあつた。二人はそのつど、この奇妙な出会いをきれぎれな言葉で満たしあつた。

この時点で先ほどの物語の外部にある場所が示される。しかし「しばしば」「そのつど」という括復法的描写(G・ジュネット)と「二人」という人称から、これがそのまま先ほどの谷底での物語を語る時点になっているわけではないことがわかる。おそらく、これらを統括する位置はもつとメタな位置であるが、それが明示されることはない。そして「杏子も早くから耳にしていた」と、「に見られるような間接話法」、「……ぼんやりしてしまつみたい、そんな風……」という直接話法を通じて、語りは次に杏子の方へ焦点化していく。この過程が二人の会話の中であること、さらには焦点の移行中にも「思わずうすくまりこんでしまった」という、という間接話法を含んでいることから、我々は杏子を語る位置がSなのかもつとメタな位置にある語り(以下「メタの語り」と呼称)によるものなのが曖昧になってゆくのがある。むろん、先述の古井の自作解説にも、こうした曖昧さを論者から隠蔽してしまう側面があつた。

どういったらいいのかしら、…(中略)…説明しはじめた

こうした語句の挿入によって、前後を単純に読めば、杏子がSに説明をしている件となる。その件は杏子による直接話法ではないが、同時に「という」などといったSによる間接話法であることを示す表現もない。つまり厳密に言えば、Sが聞いた話をもつとメタの語り手が翻訳していることにもなる。

杏子も皆と一緒につつらつつら成長する気持になつた。杏子は幸福を感じた。

「幸福だつて……」

先ほどの体験が、杏子の方から語られる部分は、メタの語りによ

る焦点の自由な移動により、谷底での共通体験の時の心情を相互補完的に語る役割を負っているわけだが、そうした間にも繰り返される直接話法や間接話法の挿入がメタの語りの存在を希薄にしているわけである。

我々は杏子の発言をSを通した間接話法や、もしくはメタの語りによる二重のフィルターを通してしか知ることが出来ない以上、杏子について何かを読もうという「欲望」は、それらを透명한フィルター、つまりなかったもの(= 虚焦点)として構築してゆくしかない。これは、杏子を通して彼を読もうとしても、姉を通して「正常・狂気」といった問題を読もうとしても、虚焦点の位置が動くだけで同様の前提が必要となる。

だとすれば、こうした特定の視点へのこだわりは、少なくとも他の読解を排斥する唯一の読みとはなり得ないわけで、各視点への考察はこの三〇年程で十分議論されてきた。むしろ我々の興味もそこにはなく、本論の目的は新たな視点の提示ではない。むしろ、問題はそうした「欲望」を深層で支える物語の構造なのである。

二 シンクロ 心情・感性・視線

第一章において、「岩がさまざまな人の姿を封じ込めているように感じ」、「まわりの岩がいまにも本性を顕して河原いっぱいに雪崩れてきそうな、そんな空恐ろしい予感に襲われて、彼は立ち止まった」とするSの内面の状態は、「杏子が見たとおり、彼は岩の上の女にむかって近づいていく途中、ありとあらゆる迷信めいた思いに苦しめられた」と杏子には既に見抜かれていた。

あの人はどんなにわが身をいとおしく思っていることだろう、と彼

女は驚嘆した。わが身をいとおしく思っ、そのために不安に苦しめられて、その不安をまたいとおしく思っ、岩屑のひしめきにたちまち押し流されそうになっばけな存在のくせして、戦々恐々と彼女をよけていく。

「かならずしも尋常な状態にあったとは言えない」Sは、表面上は杏子を救う立場にありながら、実は杏子に同情されていたという二重性は重要である。それこそが、Sが谷底の出来事を思い出す際に必ず突き当たる「不快なもの」だからである。

周囲の岩場に対して「まっすぐに立っていることにつらさを覚え」というSの感性は、「立ち上がったら、もう一気に駆け下るよりほかにない。でも、すぐに立ちすくんでしまいそう」な心情である杏子と、見事にシンクロしている。

Sの立場を最初にセラピストとして喻えたのは前田愛^⑧であり、物語にその治療の挫折を見たのが紅野謙介であるが、実はSと杏子にはお互いにシンクロする感性の共有があり、その交流は相互的であることを見落としてはならない。

そして、こうした相互的な感性の共有を最も明確に示しているのが、視線の問題である。

彼は女のまなざしを鮮やかに軀に感じ取った。見ると、荒々しい岩屑の流れの中に浮ぶ平たい岩の上で、女はまだ胸をきつく抱えこんで、不思議に柔軟な生き物のように腰をきゅっつとひねって彼のほうを向き、首をかしげて彼の目を一心に見つめていた。その目を彼は見つめかえした。まなざしとまなざしがひとつにつながった。

劇的な邂逅の後、「鋭く見つめかえし」たSの視線を「たぐり寄せようようにして」下山した杏子であったが、両者の間にはこうした視線の

交流が、以後も続くことになった。

以後の沓子の行動は、Sに焦点化した視点から見つめられていることが多い。新しい店にたどり着くことが出来ない沓子に声をかけなかったのも「物陰から一方的に見つめることの奇妙な戦慄」の為である。しかし、後に「たまたま沓子の醜怪な目撃者になってしまった自分自身の存在を、自分で重荷に感じ」たSは、

彼はまどろみの中にまだなけば、捕えられていて、見つめかえすことが出来ずに、ただ一方的に見つめられていた。見つめられることの気味悪さを、彼は知った。

と「見つめられることの気味悪さ」を知ることになる。以後「大分前から観察の構えを取っている自分に気づいた」Sであるが、それでもあなたがあたしを観察すると、あたしも自然にあなたを観察することになるのよ。どちらかだけということはないのだから…中略…沓子の目に射すくめられて、彼は動かさなかった。

と、見つめる自分と見つめられる自分を何度も再確認させられることになる。こうした両者の関係を鑑みてみると

沓子とはじめて電話で対してみると、自分たちの間では言葉というものが、それだけではいかに物の役には立たないかを、彼はあらためて思い知らされた。

という箇所は、精神分析的批評を無批判に応用する先行論に懐疑的な我々の立場に極めて重要な示唆を与えてくれる。何故なら、臨床の現場において最も重要であるべき言葉が、二人の関係では決して重要視されていないからである。

ということとは、『沓子』を読む我々は、沓子から発せられるある会話を無根拠に取り上げて、心理学的意味を作品に敷衍することは避けてはならないだろう。

しかし、ここで「視線」を介して、お互いに近づき合おうとする言葉を超えた関係は、沓子側からしるS側からしる、完全に他者を知り得るかという読みの「欲望」をも喚起していることは、確認しておいてよい。だが、問題は、物語では両者に喚起される「欲望」であるにもかかわらず、読解する側が恣意的な「欲望」を付与してしまうことにある。

三 沓子を読む「欲望」の陥穽

一章において沓子が「深い谷底で一人で座っていた」時期は「十月もなかば近く」である。「午後の一時頃」に下山を始め、「一時間半ほど」で谷底についたわけだから、沓子と出逢った時間は一時半あたりである。それから夕方にかけて下山し夜に電車に乗ったわけである。この谷底周辺の様子は以下の様に描写されている。

谷底から見上げる空はすでに雲に低く覆われ、両側に迫る斜面に密生した灌木が、黒く枯れはじめた葉の中から、ところどころ燃え残った紅を、薄暗く閑さされた谷の空間にむかってぼつと滲ませていた。

これが最終章では、やはり秋、恐らく九月の末から十月あたりと思われる。時間は電話で約束した「三時頃」から夕方にかけてであり、周囲の様子は以下のように描写されている。

家々の間をひとすじに遠ざかる細い道のむこうで、赤みをました秋

の陽が痩せ細った樹の上へ沈もうとしているところだった。地に立つ物がすべて半面を赤く炙られて、濃い影を同じ方向になつとり流して、自然らしさと怪奇さの境い目に立って静まり返っていた。

この小説は秋の夕方に始まり秋の夕方に終わる一年間である。むろん、それは単なる円環ではない。谷底での恐怖の体験は、最後は「ああ、美しい、今が私の頂点みたい。」という絶頂感を表明して終わるというの、いわば螺旋型の円環といつてよい。我々はまず、「谷底」から「頂点」というこの查子の変化のベクトルを読むべきである。そして同時に陽がほぼ遮られた中に僅かに残った「紅」の世界から、遮るものない空一面の「赤」を背景に「濃い陰」を残しているという世界への象徴を読むべきだろう。

ではそうした単純な円環からずれていったものとは何か。最初「まだ少女のような体つき」「子供のような人影」「少女」などとされた查子が、Sとの関係において「無邪気めかした喋り方だったが、目の中には嫌悪が動いていた。そして嫌悪が女の軀にひろがっていく」ようになり、肉体関係を通じて「女」という描写が多くなってゆくことは、既に先行論において指摘されていることだが、それは単純に查子の変化を意味しているのではない。

查子の裸体を目の前にしたとき、その思いがけない豊かさに彼は気押された。いままで痩せこけた神経病みの少女みたいにあつかうてきたことの仕返しを、ここで受けるような気がした。ところが軀の豊かさを顕すと、查子はかえって普段よりも痩せ細った少女の顔つきになって……

查子の変化を読みとろうとする「欲望」の前では見落とされがちであるが、変化しているのは查子の「女」を知ったSの方でもあり、メ

タの語りあるいはSに焦点化した語りは、この戸惑いをつぶさに描写し続けている。「少女」/「女」という二項対立は、単なる查子の病気との関連などではなく、查子の肉体経験を踏まえた視点人物の重要な変化なのである。

従来多くの論者は、円環構造に身を任せ查子の変化を読む「欲望」に導かれ、この小説に查子の病状の変化と性的変化を認めてきたのだろう。だが、別の「虚焦点」の語りを顕在化すれば、S自身の変化を認めざるを得ない。むろんそれは、查子を「虚焦点」として何かを読もうとする読者の「欲望」の顕在化でもあることは言うまでもない。我々はそろそろ『查子』という鏡に映るものは自己の「欲望」であることを知り、「欲望」を移す鏡自体を見つめてみようとしなければならぬだろう。でなければ我々は、鏡の前で自己の「欲望」を相対化出来ず、見せかけの客観を捏造し続けるのみである。

さて長くなったが準備は終わったようだ。查子の物語、Sの物語、姉の物語……、そしてお互いに撞着する物語。我々が自己の「欲望」を写し続けて来た鏡とは、如何なるものだったのか。

四 「繰り返すこと」と「食べること」

先ほど、Sと查子には、ある種の感性的なシンクロが認められることを指摘したが、これは両者の物語を結び上で重要である。

Sは、同じ店の同じ席での同じ時間という経験に戸惑いを覚えるようになり、「ふと同じ事の繰返しがつらくなって」「待ち合わせの店を変えることを試みる。他の箇所でも」「同じ目つきの繰返しに暗示をかけられ」「てしまうSは」「繰返し」に関して実に鋭敏である。

彼はとうとう同じ事の繰返しに耐えられなくなって、天井の暗がり

にむかつてつぶやいた。

「僕の力じゃ君をどうすることも出来ないらしいね。僕が君のそばにいなくなりさえすれば、君はまた一人でちゃんと歩けるようになるのだろう。」

一方杳子も「杳子は遠い無表情な信号の繰返しを訝っている」という様に「繰返し」に対する嫌悪感を共有しているように見える。

杳子の姉の電話の対応はいつも、「まるで正確に測られているように同じだった」のだが、ここでの「繰り返し」は、

杳子の姉の方がまるで自閉症の女みたいに、何を言われても、そっくり同じ表情で、同じ返答を依怙地にくりかえしている。

と何らかの「異常」を示すものとして語られている。一方、杳子も姉のことを

あの人は健康なのよ。あの人の一日はそんな繰り返しばかりで見事に成り立っているんだわ。

と語る。ここでは「健康さ」を示すものとして語られていることが逆説的なのであるが、それでも、「繰返し」への嫌悪感はSと共通である。だが、Sに待ち合わせの店を変えさせた嫌悪は、杳子の「繰返し」によるものであり、さらには、Sに買ってあげるポロシャツを選ぶ際、「中途半端なことをくりかえしていた」「杳子と」「同じ言葉をくりかえしていた」「店員、さらには」「同じ返事をくりかえしていた」「Sは、すべて同じ行動の「繰返し」であるが、どんな賢明な読者であっても、「ここで」「異常」を読みとるのは杳子にであらう。

恐らく、「この」「繰返し」という語の持つ両義性が、「この物語を貫いている。そして、「この」「繰返し」と密接に関連するのが、「食べる」と

いう問題なのである。

「ものを食べる」ところを彼の目から隠すように窓のほつに軀を向けて弁当を三分の一ほど「食べる」杳子は、出会った当初から「食べる」ことを示すことに関して強い羞恥を抱いていた。自分から行くと言いついたレストランであったが、いざ食する時になると「頬が恥かしさを耐え忍んでひっそりと動」き、最後は「もう、カンペンして……」と哀願するに至る。海に行く電車の中で隣の女にパンを買った時も「見るも無惨な物の食べ方」になってしまふ。

何度も「繰返」される「食」への拘り。作者自身の言説などなくとも、作品全体を読もうとすれば我々はここに気がつかざる得ない。考えてみれば、「食」自体が、咀嚼という方法においても、生活上の習慣においても、「繰返」される行為である。

なぜ杳子は「物を食べる羞恥」を強く感じてしまつたのか。和田勉¹²がするどく指摘しているように、その鍵は最終章にあるSと杳子のやりとりである。

あの人は健康なのよ。あの人の一日はそんな繰返しばかりで見事に成り立っているんだわ。廊下の歩き方、お化粧のしかた、掃除のしかた、御飯の食べかた……、毎日毎日、死ぬまで一生……、恥かしげもなく、しかつめらしく守って……。それが健康というものなのよ。

ここでは、「繰返し」と「食べる」こと「が見事に結びついて語られている。「何とかして杳子を宥めなくてはならない」と感じたSは、

「癖」つていうのは誰にでもあるものだよ。それにそういう癖の回復は、生活のほんの一部じゃないか。どんなに回復の中に閉じこめられているように見えても、外の世界がたえず違ったやり方で交渉

を求めてくるから、いずれ臨機応変に反復を破っているものぞ。

と、「ここ」でさりげなく「繰返し」が「癖の反復」とされ、さらにこの後語り手によっても「もっとも屈辱的な反復」「物を食べる時の癖」と言い換えられている。「君の癖なら、僕は耐えられるような気が「する」と、「あなたに出会ってから、人の癖が好きになるといことが、すこしわかったような気がする」という杏子は、この瞬間「繰返し」に関して明らかに共通の了解を得ている。Sがこうした地点にたどり着き得たのは、これより以前に「杏子の病気をなおしてやる」という思い上がり「が消えていたからである。

良くなること、悪くなること、それはどちらも杏子を破壊することのように思えた。杏子は自分の軀の重さを嘆く必要はない。かれは、すくなくとも彼の軀は、いまのままの杏子と、同じような繰返しにいくらでも耐えられる。それに飲びさえ感じることが出来る……。

確かにこの時点では、Sは杏子の「繰返し」には敏感であったが、結末を考慮すれば、自己の「繰返し」には鈍感であったとも言えよう。だが、最終章に向けて明らかにSの理解は深まっている。「健康人だから、わからない」と言いながら、「無意識のうちと同じ癖を剥き出しにしている獣じみた姿」を想像するSは、「健康になるといことは、自分の癖にすっかりなりきってしまった、もう同じ事の繰返しを気味悪がったりしなくなるということ」という杏子と同じ感性の中にいるからだ。

こうしてSは、「軀を合せている時よりも濃い暗い接触感」を得て、「一度と繰返し」のきかない釣合い「や」物の姿がふと一回限りの深い表情を帯び「かけるのを感じた。まさに両者が「繰返し」得ない地点に辿り着いた瞬間である。しかし、この共通理解は、杏子によ

る逆のベクトルも作用していることにも注意せねばなるまい。

確かに、杏子は「境目」「薄い膜」など「病気」と「健康」の狭間にいることを主体的に選び取ろうとしていた。しかし、自己の「思い上がり」を反省し、杏子の主体的選択に理解を示し始めたSに「そろそろ立って暮らすよう心がけています」と手紙をおくる杏子の決意は、この調和を壊してしまうものでしかあり得ない。さらに「まわりの人を安心させる」という理由であることから、それは明らかに「病気」ではなく「健康」への強い志向を持っていることがわかる。

「ああ、美しい、今があたしの頂点みたい」

杏子が細く澄んだ声でつぶやいた。もうなけば独り言だった。彼の目にも、物の姿がふと一回限りの深い表情を帯びかけた。しかしそれ以上のものはつかめなかった。帰り道のことを考えはじめた彼の腕の下で、杏子の軀がおそらく彼の軀への嫌悪から、かすかな輪郭だけの感じに細っていった。

「頂点」に居続けられないのなら、後は必ず下降するのみである。それはどこに下降せねばならないのか。「頂点」とは「明日病院へ行きます」という決意の直後の実感であることに注意せねばならない。杏子にとって「健康」も「病気」も同じことである。しかし、「ここ」で下降する場所として選ばれたのは「健康」である。これがSとの交際によって選ばれた最終選択であったならば、杏子の「病気」を治そうとし、最後には「病気」と「健康」の狭間を主体的に選択してゆこうとする杏子の立場を理解するに至りかけていたSには、実に皮肉な結末である。

だが事態はもっと複雑である。我々は常に何処かを基点としながら往復するということをまさに「繰返し」て生きている。むしろそれを

反復とさえ意識しないで。最後に「帰り道のことを考えはじめ」てしまつ彼には、本当の意味で杏子の反復への嫌悪は解り得ない。この「健康」な感覚の前では、再び「物」がSに「一回限りの深い表情」を見せることはないだろう。Sがどんなに杏子の現状を肯定したとしても、「二人とも、凄くなつてしまえばいい」と「健康の凄さ」を杏子に要求してしまつSの行為とは矛盾してしまつのだ。

一方、Sが不可避に持つ「健康」へのベクトルに感応してしまい「不安な輪郭の感覚だけに瘦せ細つて」しまつ杏子も、もし「健康」へのベクトルを突き進み得たとしても、その代償として「繰返し」に対するSとある種の共通感覚を放擲せねばならないわけで、もはやその杏子はSが魅入られた杏子ではないはずである。

「繰返し」をめぐる物語は、他の物語と絡み合うことにより、こうした様々なダブルバインドの状態を生みだしてしまつ。「頂点」を目指す物語ではなく、「頂点」を迎えてから終わる物語は、そのまま居るか、どこかに下るしかない。Sには「頂点」に居続けることは不可能であつた。その為に杏子は「健康」に下る。だが「健康」になつた杏子の何にSは魅入られるのだろうか。

さもなくば、杏子は頂点に留まり続けるのか。ならば本当の意味でSがそこにたどり着くことはないだろう。『杏子』は、陽がほぼ遮られた中に僅かに残つた「紅」の世界というその名にふさわしい場所から始まつた物語であつたが、最後の遮るべき雲のない世界の中でも、「濃い陰」を残していることを我々は忘れられない。

結局、『杏子』という物語を読むという行為において、我々は決して他者にたどりつき得ない。むしろ、杏子・S・姉、どこから覗いてみても、その先にあるのは了解不可能な「絶対的他者」の確認のみである。むしろ、なんらかの形に解釈したいという「欲望」も、この小説

の前でいつも宙づり状態のままである。だが、それこそが我々の前に立ちはだかる『杏子』という物語の他者的本質なのである。つまり、『杏子』とは決してたどり着かない他者性をめぐる物語なのである。

『杏子』に描かれる他者関係が、「視線」を契機に成立していることは、本論で述べた通りである。フォーコーが『言葉と物』において近代的表象システムを説明するモデルとした有名なペラスケスの絵画『侍女たち』。この表象世界における忠実な現実模写という見方を覆すのが、鏡の中の国王夫妻の位置づけであることは言つまでもないだろう。この絵画の前に立っているのは鑑賞者が制作者であるべきにもかかわらず、絵画中の鏡に映っているのは「国王夫妻」である。この画の前に「現実的に」誰がいてもそれはこの表象世界には無関係である。つまりこの表象世界は、現実との経路を全て閉ざされて自立している。だが逆に考えれば、この表象世界の自立性は、外部からの視線を遮断することにより成り立っている。にもかかわらず、表象世界は視線の交錯により自立しているのである。

人間は、知にとつての客体であるとともに認識する主体でもある、その両義的立場をもつて現れる。従順なる至上のもの、見られる鑑賞者としての人間は、『侍女たち』があらかじめ指定しておいたとはいへ、長いことそこから人間の実際の現前が排除されていた、あの王の場所に姿を見せるのだ。

M・フォーコー 『言葉と物』⁽¹⁴⁾

互いを認識する主体とも客体とも捉える「人間」の誕生。この翻訳は『杏子』から四年後である。「この哲学を他者論的文脈で『杏子』と重ね合わせた我々の射程は、むしろ「人間」の発見ほど壮大なものではない。だが、誰の「視線」を「虚焦点」としても一応成り立ってしま

う物語は、本質的には誰の「視線」を「虚焦点」としても完全には成り立ち得ない物語である。そこにあえて「虚焦点」を設定すれば、逆に『查子』という表象世界からその倫理的主体の欠如を逆照射されてしまう。つまり『查子』という表象世界の鏡に己の姿を映し出してしまふのである。

『查子』という物語中の全ての「視線」の位置を特権化しないことは、読者が全てを俯瞰する「王」の立場に立ったという意味ではない。それは『查子』を、「他者」を理解する物語としてではなく、「他者」を発見する物語と知ることであり、同時に、『查子』という物語自体が我々にとって「他者」であったことを発見することでもある。『查子』という物語は、そういう「テキスト」として我々の前に現前しているのだ。R・バルトはこう述べる。

「テキスト」は複数的である。ということとは、単に「テキスト」がいくつもの意味をもつということではなく、意味の複数性そのものを実現するということである。それは還元不可能な複数性である（ただし単に容認可能な複数性ではない）。

R・バルト 『物語の構造分析』¹⁵

つまり、ある「虚焦点」に対し別の「虚焦点」を対峙させ、読みの差異性を競うのは、全て「作品」へと還元可能な「容認可能な複数性」なのである。「テキスト」として立ち現れる『查子』は、むしろ我々の安易な他者観を解体させてしまう。更新されるのは、「テキスト」の読みではなく、読む我々の方なのである。むしろ、バルトに言わせれば、全ての「テキスト」はそうであるのかもしれない。だが、『查子』の読解をめぐる現実の物語は、『查子』の中の架空の物語以上に、「他者」という問題を雄弁に語っているのである。

註

- ① 古井由吉、「查子・妻隠」を語る、「三田文学」昭和四六（一九七二）年八月
- ② 古井由吉・阿部昭・李恢成、「座談会 新しい文学を求めて」、「群像」昭和四六（一九七二）年一〇月
- ③ たとえば、柄谷行人「閉ざされたる熱狂 古井由吉論」（『文芸』昭和四六（一九七二）年四月）や松原新一「現代文学における小川・古井」（『解釈と鑑賞』昭和五二（一九七七）年三月）など。
- ④ 和田勉、「古井由吉」論、「福井女子短大紀要」昭和六三（一九八八）年六月
- ⑤ 岩坪一、「『查子』論」、「古井由吉初期作品研究」（金沢大学文学研究科）平成六（一九九四）年四月
- ⑥ こうした論は後を絶たないが例えば、三好暁光「查子の『病的』体験と青年期体験 パトグラフィと心理療法のかかわり」（『日本病跡学雑誌』昭和五六（一九八一）年五月）、栗林昌子「古井由吉論」「查子」をめぐって」（『国語国文研究』昭和五九（一九八四）年三月）など。
- ⑦ 曾根博義「進め方と実例文体・表現に即して 古井由吉『查子』」（『国文学』昭和六四（一九八九）年七月）は、論文作法の例という雑誌特集の意図以上に、論自体が一章の詳細な文体研究として重要である。
- ⑧ 前田愛、「空間の文学へ」、「文学界」昭和五四（一九七九）年九月
- ⑨ 紅野謙介、「古井由吉の物語宇宙」「查子」論巻《セラピスト》の憂鬱」、「国文学」昭和六三（一九八八）年八月
- ⑩ 一章の空の描写については、田口律男「『查子』論 ヨウコではない查子のために」（『日本の文学』昭和六四（一九八九）年五月）での指摘がある。
- ⑪ 例えば、先述の岩坪論など。
- ⑫ 前述の和田論参照。
- ⑬ 『查子』というタイトルの分析については、前述の田口論に詳しい。
- ⑭ M・フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳 昭和四九（一九七四）年新潮社 332頁
- ⑮ R・バルト『物語の構造分析』（花輪光訳）昭和五四（一九七九）年一月 みすず書房 97頁